

歌の背景

宮内博子

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。お話ししましょ。

むかしむかしよ。
燃えろよ、ペチカ。

白秋と山田耕作（耕作）のコンビによって数多く作られた童謡の一つ「ペチカ」。しんしんと冷え込む冬の夜の、暖かな居間を想像させるこの歌が、私は小さい頃から好きだつた。幼少期の私が「ペチカ」の意味を母に尋ねたとき、たしか「暖炉のようなもの」と教えてくれたように記憶している。その「暖炉」が、自分の家にある小さな炬燵や石油臭いストーブではなく、とてもおしゃれでこのうえなく暖かな暖房器具であることは容易に想像できた。

「ペチカ」は大正十四年、アルスより刊行された白秋の童謡集『子供の村』に収録されており、「この童謡は南満教育会用として作つたものの一つです。作曲は山田耕作氏です。なほペチカとはロシヤ式暖炉のことです。」と註が

添えられている。この歌は、大正十三年に南満州教育会から依頼され、満州へ移民した日本人向けに作つたものだつたようだ。ロシア式の暖炉とされている「ペチカ」だが、同様に寒さの厳しい満州においても家庭に備えられていたのだろう。

雪のふる夜はたのしいペチカ。
ペチカ燃えろよ。お話ししましょ。

はねろよ、ペチカ。

暖炉で炎が立つ様子を「火の粉ばちばち」とオノマトペを使って表現している。「ペチカ」の「ペ」と「ば」の破裂音により、樂しげな家族団欒の様子を想像させるこの歌だが、複雑な感情を抱く人もいることを知る。

二〇二一年一月六日の朝日新聞に「ペチカ」に関するこんな記事があった。「当地の風土や暮らしを、日本語の叙情豊かな詩に織り込んだ満州唱歌。満州への侵攻を正当化、美化する役割を結果的に担つていた」。当時九十一歳の詩人、金時鐘氏の言葉である。ペチカのある生活への憧れが、満州へ渡るきっかけになつた人もいたのかもしれない。耳に優しいメロディや詩は、日本の童謡の素晴らしさである。その歌の背景など、本当は知らなくてもよいのかもしれない。が、知つてしまつた今、残酷さも含めてその歌の魅力だ、などと簡単に言うことはできない。